

第1回文化講座 ご報告

「映画を読む 感想から批評へ」

—『花束みたいな恋をした』 を題材として—

折井貴大先生(高校英語科)

6/26(日)に第1回文化講座を開催しました。「映画を読む--感想から批評へ--」というタイトルで高校英語科の折井貴大先生にお話をさせていただきました。昨年ヒットした映画『花束みたいな恋をした』を題材として、映画の細部に丁寧に着目しながら、作り手のメッセージを読み解き、作品をより深く味わう方法を伝授していただきました。映画を「読む」ことの魅力を体感でき、今後の映画鑑賞の仕方が変わる目から鱗の講座でした!



【講演のあらまし】

本日のテーマは「映画を読む」。映画は「見る」ものですが、今回は映画を「読む」というのがどういうことかをお話しします。感想から批評へのステップアップを目指すというのが、本日の講座の目標です。

課題作品は、菅田将暉と有村架純の2人が主演の恋愛映画『花束みたいな恋をした』。一応皆さんご覧になっているという前提でお話をさせていただきます。

あらすじを説明すると単純な話です。一組の男女が、出会い、惹かれ合い、すれ違い、喧嘩して、別れたという、ただそれだけ。非常に単純なひねりのないお話に見えますね。でも、もしそれだけの映画だとしたら、2時間の尺を使って映画を作る必要がない。2時間もある映画の中に一体何が描かれているのかということを見て取る必要があります。

映画には、無駄なものは基本的に映っていません。映画の基本的な作り方は、素材をたくさん撮って集めてから、本当に残したいものだけを編集して完成品ができるというものです。だから、無意味なものや要らないものが、最終的に完成された映画に残ることはないはずなのです。



感想と批評のちがいを

「感想から批評へ」というテーマについて。映画を見れば、「面白かった」「つまらなかった」のような「感想」は誰でも持つでしょう。感想は、その人がどう思ったかという個人の主観に基づく評価や印象のことです。感想はその人だけの問題ですから、正解も間違いもありません。一方、「批評」には「他者への眼差し」が必要。自分の中だけで完結することなく、作者や、その作品を見た他の人はどう思うかを考えるということです。つまり、「この映画はこういう内容です」と言ったときに、他の人が納得することが必要なのです。

例えば、いま公開中の『トップガン・マーヴェリック』を観て、「トム・クルーズがカッコいい」という人もいれば、「戦争や軍隊をカッコよく描く映画は好きじゃない」という人もいます。どちらが正しいということはありません。「カッコよさ」や好みには客観的な基準はないからです。

一方、「本作におけるトム・クルーズのカッコよさの秘訣は撮影の技法にある」と言う、これは批評になります。撮影の技法が問題だとしたら、どの技法がどのような効果を出しているのかを説明しないとイケない。主演のトム・クルーズについて言えば、30代にしか見えないくらい若々しいシーンと、還暦間近のおじさんの顔が交互に出てきて、映画の中で大きく印象が変わります。カメラの角度とか照明の当て方によって、顔に刻まれたしわの一つ一つが見えたり見えなかったり、顔つきが変わってくる。

実は、この映画の主題は、戦闘機乗りだけではなく、俳優トム・クルーズの人生や職業観そのものでもあります。トム・クルーズもいつか年老いて、今のようなアクション俳優ではいられなくなる。その時はもう遠くないかもしれないけれど、でも俳優を続けられなくなる日は「今日じゃない」と。それが、「パイロットがいなくなる日は今日じゃない」「パイロットは職業じゃない。俺そのものだ」というトムのセリフにそのまま込められているというわけです。

では本題に入りましょう。批評には何が必要かといえば、「他人を納得させる根拠」です。「なぜそう思ったのか」が他の人に納得できるものであること、それが批評の条件と言えます。それには、作品を分析し、意味づけすることが必要です。この場面にはどんな意味が、このセリフにはどんな意味があるかを見ていく。できる限り事実を見る。自分の中に生じた思いつきは感想でしかないので、事実を集めることが大事です。



映画を味わう上での3つのテーマ

本講座のテーマを説明します。その①「細部まで見る」こと。お話だけを追いかけるのは、映画の楽しみ方としては不十分です。今回の『花恋』はすごく単純な話に思えますが、ストーリー以外の部分をしっかり見てみましょう。映画にはサブカルチャーの作品が山のように出てきます。『AKIRA』、『今村夏子』、『シン・ゴジラ』、『ゴールデンカムイ』…。全部実在の人物、実在の作品。なぜこんなにたくさん実在のものを出すのでしょうか。もちろん意味があります。その②「時代背景を考える」こと。主人公の「麦」と「絹」は一体どんな人物か、その描かれ方を見てみましょう。その③「比喻」。本作には比喻がたくさんありますが、まずはタイトルを見てください。「花束みたいな恋」って、意味がよくわからないですよ。ね。「学生どころ、花束みたいな恋をしました」と言われても、「なるほど!」と納得はできません。「どういう意味?」と疑問に思うはず。それを考えてみたいというのが、3つ目のテーマです。

細部まで観る

テーマ①「細部まで見る」。細かいところに注目しましょう。

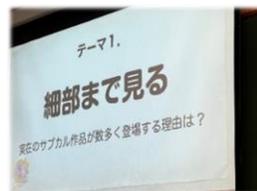
まず、押井守。最初に麦と絹が出会うきっかけになった場面

に、アニメ監督の押井守が本人役で出ています。たとえば宮崎駿とは違って、だれでも知っている有名人ではないけれど、サブカルチャー、アニメ、漫画みたいなものが好きな人だったらわかる。絶妙なラインを突いてくるチョイスの巧さです。

『AKIRA』という漫画も、ストーリーにはそんなに関係ないのに部屋のなかでずっと画面の真ん中にありますね。ここまでしつこく画面の中に置くということは何か意味があるはず。です。

別の例を挙げると、2人の家にはタランティーノの『イングリシアス・バスターズ』のDVDがある。タランティーノは「映画通」が名前を挙げがちな監督で、ある種のお約束みtainなもの。これと対比される例ですが、冒頭の場面で、麦と絹の2人の前に軽薄な感じのサラリーマンがいて、女の子に向かって「映画? 見る見る! 『ショーシャンクの空に』とかって言ったときに、麦が軽くバカにする場面がある。『ショーシャンク』はすごくいい映画ではありますが、映画なんてろくに見ていないのに「映画見てる」って言う人が挙げるお約束の作品なんです。映画好きはニヤっとしちゃう(笑)。こういう細かいところに気が利いているのが面白い。あるいは、Netflixのドラマ『ストレンクス・シングス』のように、チラッと映る画面で時代を感じさせるところも。

なぜこうした作品や人物をたくさん出すのかというと、映画を見ている私たちの現実と、彼ら(映画)の世界の繋がりをたくさん作って、これは自分たちの世界で起こっている出来事なんだというふうに観客に感じさせたいからだと言えます。逆に、ファンタジーの世界だという描き方をしたかったら、私たちの現実とは徹底的に繋がりを切る。現実から切り離された世界、たとえば剣と魔法のファンタジーみtainなものにしたかったら、こういうことはふつつやりません。



時代背景を考える

「時代背景」を考えましょう。最初 2020 年という字幕から始まって、その後すぐ 2015 年に戻り、2015 年から 2020 年の



5 年間の物語ですよ、と最初に宣言してからお話が始まります。恋愛を描きただけだったら、「わざわざ」そうはつきり示す必要はありません。このお話は、2010 年代後半の出来事じゃないといけな理由がある。もっと上の年代の皆さんも似たような経験があると思うかもしれないが、2010 年代後半に若者だった人たちの話であって、「これはあなたたちの話じゃないですよ」ということを実は言っているのです。

麦と絹の共通点は「サブカル好き」。物語の最初は、麦と絹がいかにも似た者同士かということのをこれでもかというくらい演出しています。その演出で使われているのが、先ほども触れたサブカルチャー。では 2 人の違いはどこにあるのか？ 絹の両親は大手広告代理店勤務です。サラリーマンの中ではトップクラスの年収で、しかも社会的地位や権力があります。つまり、絹は富裕層の家庭の娘なのです。2 人のアパートを絹の両親が訪ねてくる食事のシーンをよく見てください。4 人は部屋の真ん中にある明るいテーブルで食事しています。

一方、麦の父親は新潟の花火職人で、経済的に豊かではありません。父親は「花火職人の仕事を継がないんだったら、仕送りはやめる」と言って、麦は月 5 万円の仕送りを止められてしまいます。麦の父親が来たときは、3 人は縁側で床に座っており、窓の外の暗さが際立ちます。花火職人が来たのに、外の夜空がこんなに暗い。この構図は、そのまま両家の社会的経済的地位の上下関係を示しています。絹の両親の広告代理店という職業は、年収が高いだけではなく、日本社会の「上流」。メディアを牛耳って、「世の中はこうだ」という雰囲気を作っている、社会の上位層です。それに対して、社会の状況になすがままに振り回されるしかない職人である麦の父。このコントラストは、画面の中にはっきり描かれています。このように、2 人の一番の違いは「家柄」にあるのです。

名前に込められた意味

主人公の名前は「麦」で、ヒロインの名前は「絹」ですが、これらは人の名前としてはあまり多くないですよ。麦と絹の出会いとだけ聞いて、人間同士の出会いと受け取る人はあまりないでしょう。物の名前だというのが普通です。麦というのは食べ物、生活の糧で、ないと困るものです。しかし、「貧乏人は麦を食え」と言われたように、麦は日本では貧しさの象徴でもあります。一方、絹は高級品の代名詞、ぜいたく品です。最近、絹のような家庭に生まれた人を、「上級国民」だとか「親ガチャ」で当たりを引いたとか、ずいぶん品のない言い方をする人もいますが、こうした言葉が市民権を得てしまうほどに、今の日本の若い人たちは、社会には「上下関係」があり、どの親のもとに生まれるかで人生が左右されるという感覚の中で生きているのです。すなわち「格差社会」です。これが「麦」と「絹」という名前に込められていることは明らかです。ここまでの話をまとめると、本作に最初からあったひとつめの比喩は主人公たちの名前で、2 人の階層格差がそのまま表れているということになります。

麦と現代の社会情勢

麦は絵描きになりたかったが、諦めてしまいます。イラストの仕事をしてきた人が、最初は 1 カット 1000 円で依頼したのに、やがて 3 カット 1000 円に値下げをしてきた。それに対して、「1 カット 1000 円という約束だったはず」と返したら、「そしたら、いらすとやを使うんで大丈夫です、お疲れさまでした〜」と言われる。ひどい話ですよ。

この、麦が絵描きになることを諦めるきっかけが現代的なものです。よくある話だったら、自分には才能がないと思って筆を折るでしょう。ミュージシャンや画家を目指す人間は、自分の才能のなさや、他の人に勝てないということを知って諦めるのが普通です。でも麦の場合は違います。「いらすとや」、つまりタダで使えるイラストがあるからお前なんか金払う必要はないと言われて、そんな仕事では食べていけないと思って就職を決心する。



今の日本は、サービスがタダで手に入るのがあまりにも当たり前になりすぎています。「いらすとや」なんて、無料でイラストを何にでも使える。でも、本当はそんなことはおかしいんです。あれだけよくできた使い勝手の良いものが大量に提供されているのに、タダで使えるなんて何かがおかしいと思うべきです。サービスには、本来は対価が発生しなければいけないのに、それが「安い」を乗り越えて無料で使えるのが当たり前だとみんなが思っているのが今の日本です。これでは、もう経済大国とは言えません。

物価を見ても、アメリカとかヨーロッパに比べたら、日本はずいぶん安い。モノが安いということは、すなわち人が安いということ。人件費が安いから、モノも安くできる。日本とアメリカの最低賃金は全然比べ物にならないし、いま日本人がアメリカに行っても、物価が高くてろくに買い物もできません。バブルの頃とは全く違う状況になっています。こういう社会の状況の中で、ジト〜とした嫌な感じの苦しみが、麦にはまわりついてくる。すごく現代的ですよ。日本が豊かだった 80 年代や 90 年代だったら、こういう設定には説得力がなかったと思います。

麦と絹のすれ違い

次は、麦が就職を切り出す場面を見てみましょう。「オレ就職するね。絵はまた始めればいから。ダメ？」という麦に対し、絹が「ダメじゃないけど、このままずっとこういう感じが続くのかなと思ってた」と応じる。この 2 人の会話は「変」だと思ふ必要があります。



「こういう感じ」とは、大学を出て、定職にもつかずフリーター生活をして、好きな絵を描いて生きていく暮

らしのことで、そんなものが続くわけないでしょう。つまり絹は、自分の力で金を稼ぐことが必要だと思っていない。親が金持ちで「実家が太い」からです。絹は自分の力で金を稼がなくても、いざとなったらこの 2 人で住むアパートを出て、お金持ちの実家に帰って「ただいま」と言ったら、それで済みます。ところが麦は父親に勤当されて仕送りももらえず、もう二度と実家の敷居はまたげない。だから「自分の力で生きていくしかないんだ」という悲壮感を抱えた麦と、

人生というのは「自分の好きなことだけしていればいいんだ」という絹の間の断絶は、非常に深いのです。

もう少し後で、麦と絹が口論になる場面があります。カップルなら誰でも喧嘩はするでしょうが、この 2 人の言い争いはただの喧嘩ではなく、2 人の断絶が浮き彫りになっています。追い詰められて感情を爆発させる麦の幼稚な失態と見てしまいがちですが、実は絹の発言も相当おかしく、「壊れている」と言ってもいいほどです。「取引先に『死ぬ』と怒鳴られている」と吐露する麦に対して、絹はほとんどいたわりの気持ちを示しません。どうして、「そこまで頑張らなくてもいいよ」と言ってやれないのでしょうか。麦がつらい仕事に耐えているのは、ひとえに 2 人のいまの暮らしを守るためです。それなのに絹は「私は嫌なことやりたくない。好きなことだけして生きていたい」と言い放ちます。絹には、パートナーを支えるために自分が頑張るという発想は初めからありません。だからその発言には「私は」という主語はありますが、「あなたは」という主語が欠けています。この映画を見るとき、たいていの人はどちらかという「麦寄り」または「絹寄り」のいずれかで見てしまうと思いますが、反対側への想像力がないと、物事は一面的にしか見えないということを、この場面は示しています。

麦はロジスティクス、つまり物流の会社に就職します。他の業種ではなく、物流の会社であるという設定にも意味があります。「配送中のトラックを海に捨てた」ドライバーのエピソードが出てきますね。運送業も現代社会で搾取が起きている代表格です。ネット通販の「配送料無料で翌日配達」は、とても便利でありがたいですが、これもよく考えるとおかしなことです。モノを届けるためにはそこにコストがかかっているのに、みんな無料が当たり前だと思っていて、その皺寄せは当然配送業務の人件費を圧縮するところに行く。便利で安いサービスの陰には、必ずその犠牲になっている人がいます。労働というものがこんなに歪められて苦しいものになっているのが、まさに現代という時代だというわけです。麦の「生きるってことは責任だよ」というセリフは、絹の母親が麦に言った言葉ですが、この規範を麦は自分でも意識しないままに内面化してしまっています。絹の母親の言葉を内面化する麦と、母の言葉をこれっぽっちも意識していない絹のすれ違いは、じつに悲しいですね。

「花束」の比喩を理解する

さて比喩を理解するということで、『花束みたいな恋をした』というタイトルの意味は何だろうかと考えてみましょう。

花束は美しいだけのものではありません。「花」と「花束」は違います。花束は綺麗ですが、ただの飾りでしかありません。根っこがないから、水から出せばすぐに枯れてしまい、寿命が短い。地面に根を下ろして、そこで自分の力で生きていくことはできません。

つまり花束は、綺麗な飾りだけど自分の力だけで生きていくことができず、すぐに枯れてしまうものの喩えです。では「何が」花束みたいな性質を持っているのかというと、一つはこの映画に多数登場するサブカルチャー、もっと広く言えば文化(映画、漫画、小説、舞台、お芝居など)のこです。

麦が仕事に没頭していく中で、部屋の本棚に置かれている本が変わっていきます。漫画や小説に代わって、いわゆる自己啓発書が増えていくのです。麦の生き方において、文化はどんどん端に追いやられてしまう。つまり麦の文化という花は枯れてしまいます。麦の暮らしには豊かさがなく貧しい。ここで言う貧しさというのは、ごはんを食べるのに困るという意味の貧しさではありません。「生きるっていうことは労働なんだ、責任なんだ」という考えにとらわれている、そういう人の暮らしの中には文化という花が枯れてしまい、代わりに雑草みたいな自己啓発書が本棚をどんどん占めていきます。麦の仕事机は青色＝「寒色」が基調で、冷たい色合いの光に包まれています。これはもちろん、視覚的な効果として冷たさを演出する目的で使われています。部屋の中で、本棚の柱が麦と絹の2人を隔てる境界線になっており、麦の側は冷たくて暗く、絹の側は暖かい。視覚的に2人の今の状況が、分断という形で画面に表現されています。

構図に加えて、画面の色もとても大切な要素です。このように、セリフで語らなくても画面が物語を語る、これが映画の魅力です。

麦は大事にしていた文化を枯らしてしまっ、とどど人生の豊かさを失っていくという欠落は非常に見やすいですね。

一方、絹は何も欠けていないのかというと、決してそんなことはなく、絹も大事なものが欠けている人物として描かれています。絹は「遊びを仕事にする」と言ってイベント会社の派遣社員になり、それに対して麦は感情的に怒ります。正社員の身分を捨てて、わざわざ不安定な非正規労働者に

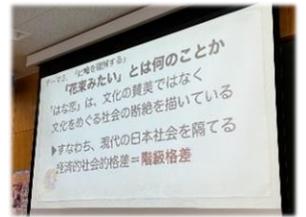
なるということが麦には許せなかったんですね。絹は、自分のやりたいことをやる芯のある自立した女性としては描かれていません。転職にあたって、絹は自身の能力が買われて仕事に誘われたわけではありません。イベント会社の社長は、要するに絹が若くてかわいい女の子だから雇ったという、ただそれだけのことなのです。絹はいつも暖かい色に包まれているが、社長や会社の人々との酒席の場面では、青い冷たい色に囲まれています。このシーンは、絹自身もまた搾取の対象としての飾り花、「花束」でしかないことを示しています。役者の世界、映画の世界でもそうですが、女性が社会に出て仕事を得るときには、どうしても女性であることに縛られがちです。

「花束みたい」というのは、文化を枯らしてしまう麦のこでもありますが、もう一方では実家という花瓶に生かされている絹のこでもあります。絹の自立できない、根を下ろすことができないふわふわした生き方が、根のない「花束」と喩えられているのです。

どうして麦は文化を忘れていったのに、絹はいつまでも若い頃のサブカルチャーを大事にし続けているのか？それは2人の生き方の問題だけに起因しているわけではありません。文化に対する向き合い方には、2人の階層の差、社会の断絶の問題があります。かつて日本が豊かだった頃は、若者の恋愛が階層格差によって断絶されることは、そんなになかったはずで。この2人は、まさに今の日本社会を隔てている、暗くて冷たい、目に見えにくい断絶に引き裂かれているというところに、現代版「ロミオとジュリエット」とも言うべき悲しみがあります。

麦と絹の2人もが文化を純粋に楽しむことができていたのは、自分の力で自立しなくていい学生時代の間だけでした。だから、タイトルの「花束」とは、社会に根を下ろさず生きていられた学生時代という意味でもあります。

全体的に暗い感じの講座になってしまいましたが、それでもラストシーンで前を向いて生きていこうとする2人の姿勢は、希望を感じさせるものです。格差や分断に苦しみ、社会の状況が苦しくても、一人ひとりの暮らしが続いていく中に希望の光はある、というメッセージを、この映画は最後に伝えていると思います。



【参加者の声】



- 元々好きな俳優がでていたので、配信で観ていた映画です。観たあと何かスッキリしない感じがありましたが、そのままにしていました。今日参加して、自分のなかで納得と理解とスッキリと謎解きができました。ぼやんと映画を観るのと自分の深いところで観るのとでは、こんなに違うのだと勉強になりました。映画って楽しいですね。ありがとうございました。
- 今日興味深いお話を伺い、これから映画鑑賞の仕方が変わりそうです。楽しい講演をありがとうございました。
- 初めてこのような講座に参加させていただきました。忙しい毎日ですが、時間を作って映画をみてみよう、という気持ちになりました。また先生の語り口調にすっかり聞き入って、また先生の講座に参加したいと思いました。
- 感動しました！本編を見た感想はイマイチだったのですが、折井先生の解説で評価が一変しました。これからいろいろな映画を見てみようという気になりました。
- 一人で映画を見ただけでは、作品の意図をよく理解できていませんでしたが、本日の講座でわかりやすく説明して頂けてとても良かったです。細部に注目したり、撮り方にも注目する事で映画をより楽しむことが出来て、とても楽しい講演会でした。先生のお話もユーモアがあって飽きることがなく、時間があっという間に過ぎてしまいました。本日はありがとうございました。また映画の講座があれば受けてみたいです。

折井先生からのメッセージ

お忙しい中、父母懇文化講座に多数ご参加いただき、ありがとうございました。趣味の話にもかかわらず、みなさんが真剣な様子で聞いてくださったので、とても楽しく話すことができました。「映画の見方が変わった」というような好意的な感想をいただき、やってよかったと満足しています。自分が趣味で勉強していることを他の人に還元できたなら、これに勝る喜びはありません。

一点、本日の講座で言いそびれたことがありました。今日の内容は決して私一人で考えたオリジナルではなく、ネットや雑誌などの様々な批評を参考にしています。中でも一番優れていると思ったのが、本日のレジュメの裏面に掲載した、「週刊文春 CINEMA!」の記事です。今日の発表はこの内容を軸に、自分なりの肉付けをして仕上げました。

講座でもお伝えしましたが、人に何かを語りたければ、「自分以外の人はどう考えているか」という他者へのまなざし、そして入念なりサーチが不可欠です。今回は、まさに「他者のために語る」という経験を通して、私自身の学びも普段以上に深まりました。貴重な機会をいただき、ありがとうございました。



折井 貴大

編集後記

誰かと一緒に映画を観た後は必ず、批評しているつもりでここが面白かった、ここはおかしいのではないかと意見交換をしていました。今回「批評には他者への眼差しが必要」というお話を聞いて、今までの批評は自分目線のものばかりで、ただ感想を話していたのだなと思い直しました。

題材となっている『花束みたいな恋をした』は恋愛映画として観た方も多かったのではないのでしょうか。折井先生の講座を受けた後は、随分印象が変わりましたね。格差社会に分断された背景を知り、二人の恋の結末に皆さん納得されたと思います。

何も考えずに観る娯楽映画も楽しいですが、メッセージを紐解きながらじっくり観る映画にも挑戦してみたいと思いました。

～今年度限定！「広報部長のつぶやき」～

※ T.F.Letter 本文内容とは関係ございません

トランプの七並べをして発見！
ハートのキングはひげがない、
ダイヤのキングは斧を持つ。
スペードのキングは右を向き、
クラブのキングは武器を地面につけているよ。
なんだそんなことかって言われるかな？